君とドーナツ食べ
たいな。

君とドーナツ食べたいな。

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=21839032

ヒュンマ, たまきず

2024/3/22～の「okosama」に合わせた小話です。
・ヒュンマちゃんの子供が出てきます。
・たまきずの勇者くんはヒュンマちゃんの子で、ラーハルトの弟子という設定がありました。それをフォローしたお話です。
・お子様設定大好きな方はどうぞ！（苦手な方はご注意ください）
苺はほぼ関係ありませんが、可愛かったので表紙絵で採用です(笑)
ヒース君がラーさんに弟子入りするきっかけの、みんなでわちゃわちゃ話です。

Table of Contents

君とドーナツ食べたいな。

※たまきず（ダイ大のスマホゲーム略称）とクロスオーバー（コラボ？）しております。
　男の子がヒースくん（ヒースの花言葉は「孤独、謙遜、休息、博愛」）お兄ちゃん
　女の子はベルちゃん（ベルフラワーの花言葉は「感謝、誠実、不変」）妹ちゃん
　です。
※お兄ちゃんが小さい時の、ラーさんに弟子入りするきっかけ話です。
　妹ちゃんが生まれる前の話です。
※オールキャラを目指して、出せるだけ出しました！！(笑)
　ヒュンケルは空気、マァムちゃんはお留守番です。

推しCPのお子様が苦手な方もいらっしゃるので、改ページいたします。

「れおなへーか、おまにぇきいたたき、ありがとぅーごじゃ？　ごじゃ？」

　ヒースは途中で言葉を忘れて、父親を見上げる。
　それを見て、ヒュンケルは子供の頭を撫で、レオナはぷくぅと頬を膨らませる。
「ちょっと、ヒュンケル！　どういうこと？」
　レオナはぐりんっと顔を向けて、ヒュンケルに真意を問う。
　ここはカール王国の謁見の間。
　なぜかヒースとヒュンケルがこちらにいるというので、ウキウキと会いに来たら他人行儀な挨拶をされた。
　元々、ヒースが小さい……いや、赤ん坊の頃から遊んできた仲

だ。たまにしか会えない小さな友達。
　そんな子から、急に格式張って挨拶されれば、泣きたくなる。
「れおなじょおうにたいして、ふっそんってあるっていわれたの。れおなおねーちゃがめっていわれないよーに、がんばりゅの！」
　にっこりと笑われて、レオナは「きゃわっ！」と嬉しい悲鳴を上げる。
　こんな時に、ツッコんでくれるマァムは第二子妊娠中のためこの場には不在だ。
「ふっん！」
「ふん？」
「れおなへーか、おまにぇきいたたき、ありがとぅーごじゃりますっ！！」
　胸に手を当てて、ぺこりと頭を下げる子供の姿に、周囲がざわめく。可愛い~という方向で。
「ヒース君、素敵な挨拶をありがとう。でも、私達はお友達なのだから、ここからはいつも通りにしましょう」
　レオナはヒースに近付くと、すっと目線をヒースに合わせる。
「あいっ」
　きゃわー！　と周囲の声が漏れてくる。
「ひゃ？」
「後ろ、とーった！」
　ダイがヒースを背後から持ち上げ、片腕に抱き上げた。
「だいにーちゃっ！」
　きゃっきゃと子供の声が溢れる。
「ヒース、さっきの格好いい挨拶をしなさいっていったおじさんを教えて？」
「ん？」
　こてりと首を傾げてから、「あにょひとと、あにょひとと、そのとなりのひとぉ」と元気に指さして教えてくれる。
「ヒース、人を指してはいけない」
「ヒュンケル。注意をする場所、そこじゃねーだろ」
　自称大魔道士が呆れたように呟く。
「ぽぷちゃ！」

「ポップお兄様だぞ、ヒース」
　ポップがぐりぐりとヒースの頭を撫でる。
「ぽぷちゃま！！」
　ふふん、言えたぞ！！というポーズを取る子供を、ポップは撫で繰り回す。
「ちょっと、今、ヒース君が指さした人、定型報告書になぜそのようなことを言ったのかまとめて明日の朝までに提出ね」
　レオナは投げやりにそう言うと、「ヒース君、ドーナツあるわよ、食べる？」と顔をゆるゆるにしながら尋ねる。
「たべゆー」
「あと、リンゴもあるぞ。ヒース、このリンゴ、とーちゃんと分けて食べて欲しいから、ぱっかーんて出来るか？」
　ポップがどこからかリンゴを取り出してヒースに渡す。
　なぜ、リンゴ。
「ぱっかーんしていいの？」
「いいぞー。あ、あのおっさん達に見えるように、そうそうその方向」
「はーい、じゃあ、ぱっかーん」
　のどかで可愛らしい掛け声と共に、『バキィン』とリンゴが真っ二つになった。
　周囲がしんと静まる。
「おとーしゃ、はんぶんこっ」
「とりあえず二つ共預かっておこう」
　ヒュンケルがリンゴを受け取り、ヒースの小さな手をレオナが拭く。
　周囲は、幼子の怪力に息を呑んだ。
「あのさ～、ヒュンケルとマァムの子供なんだぜ？　下手したら未来の勇者さまかもしれないんだ。いい加減、マトリフ師匠の時の二の舞、三の舞は止めたらどうだ？」
　ポップが周囲を見渡して言う。
　穏やかだが怒りが籠もった声は謁見の間に響き、しばらくの間、音をなくした。
　そんな中、扉が開く。

「おやおや～。この微妙な空気はなんでしょうね～」
　のんびりとした声が届く。
「アバン先生、ご無沙汰しております」
「レオナ陛下、お久し振りですね」
「止めてください、先生。今、ヒース君にまで礼儀正しくされて、私はハートブレイク中なんです」
「ひゃーとぶれいく？」
　こてりと首を傾げるヒースを見て、レオナが高速なでなでをヒースにしていた。
「なんていうか……短めに説明をお願いします、ヒュンケル」
　アバンがヒュンケルを見つめて説明を求める。
「ヒースへレオナ陛下に対する礼儀を説いた家臣がいた。ヒースがその文言を格好いいと懸命に覚えた。それを披露したら、レオナ陛下がやさぐれた。そして、現在。という感じです」
「うーん、合っているのかな～？」
　ダイが首を傾げ、ポップは「あはは～」と乾いた笑いを零した。
「あばしぇんしぇ～。ぱっかーんできたお」
「さすがですね～。ヒュンケルが両手で持っている林檎ですね。綺麗な割口です。流石です」
「しゃすが～」
　ぺちぺちと小さな拍手が響く。
「あ……あのぉ、みなさんが規格外なこと、もう少し他の方にもわかるようにされた方が……」
　ぽそりとメルルが言う。
「ふむ。では、オレが代表しよう」
　そう言って、謁見の間の中央へ進んだのはラーハルトだ。
　気配はなかったが、ダイの後ろに控えていた。
　いつも通りに。
　魔槍を構えて、「ダイさま、まずは物凄くゆっくり基本動作をします」とダイへ伝える。
「ラーハルトのゆっくりな基本動作って、たぶん熟練の騎士くらいの速度だよね……ラーハルト、頑張って！」
「はっ！！」

ダイへ応えると、ラーハルトは槍を振り回す。
　突き、払いを取り混ぜた動きはまるで舞のようで、槍が空を切る音だけが響く。
　速い。
「では、次はヒュンケルと打ち合いをしている時の速度で。ちなみにヒュンケルは騎士団長レベルだ。まだ体調が完全ではないからな」
　言外に体調が戻ったヒュンケルは騎士団長より凄いと言っているのだが、わかりにくい。
　空を切る音が響き、そして先程よりも速い。
「おお、面白そうなことをしているな」
　アバンの後に入ってきただろうクロコダインが、ラーハルトを眺めて笑う。
　そしてクロコダインは、ダイの頭を撫でる。
「オレじゃなくてヒースを撫でればいいのに」
「うーむ、ヒースの頭を急に撫でるには、力加減に自信がないからな」
「……そりゃそーだ」
　大魔道士さまが苦笑を零す。
　ヒースは、ラーハルトの基本動作……舞の要素が入ってきているので演舞と言った方がいいだろう、をキラキラした瞳で見つめている。
「クロコダイン、相手をしろ」
　ラーハルトが簡単な演舞を終え、クロコダインに言う。
「いつもの、隙はダイの拳でいいか？」
「ああ」
　そして、クロコダインが謁見の間の中央に進み、戦斧を構えた。
　アポロがどこからか中央沿いに現れてフィドルを構える。
　パプニカ騎士団では、最近よく見る光景だった。
「アポロ、いつもの曲だ」
「わかった、私の遅さは気にしないでくれ」
「がっはっは！　オレ達の速さに追いつけるなら、アポロ殿は音楽家として世界一の速さになるな」

ラーハルトも構えた瞬間、アポロが一音を引く。
　明るい祭りの時に流れるような音楽に合わせて、二人が武器をぶつけない模擬戦を見せる。
　ぶつかる直前で動きを止め、まるで舞っているかのように余裕すらある速度で動く。
　音楽が徐々に速くなるが、二人の動きは余裕すらあった。
　休憩中に踊っているかのような楽しささえ感じられる。
「すごーい！！」
　一般人の目には、すでにラーハルトとクロコダインがなにか動いているということしか見えない。
　周囲の人間はぱかーんと口を開いている。
「きゃーーー！！！」
「うわぁ！」
「ぎゃあ！！」
　観客と化していた周囲から悲鳴が上がる。
　見ると、ヒースに名指しをされた家臣の両腕両脚の衣服が綺麗に切られていた。切られた先の布は木っ端微塵にされていて、紙吹雪のように周辺に舞い降りた。
　いい年をした中年男性の半袖半ズボンは見ていても不気味だ。
「うわー、ラーハルト、大人げねー」
　ポップが遠い目をする。
「肌を傷付けずに服だけ舞ながら着るって、凄い技術だね！！」
　ダイの明るい声が響く。
　音楽は一層速くなり、二人の振り回す槍と斧によって起きる風が謁見の間を舞うように通り過ぎる。
　と、急に風がやみ、音楽もやんだ。
　ラーハルトとクロコダイン、アポロが、ダイとレオナに向かって一礼をし、顔を上げる。
　演舞が終わった。
　ぺちぺちぺちぺちと小さな拍手が起き、そして周囲も拍手を始める。
「しゅごいの、しゅごいの！！　ボクもヤリつかうーーー」
「……ヒース……」

ヒュンケルが闇落ち寸前になっているが、それを無視してレオナが三人を褒める。
「ラーハルト、クロコダイン、アポロ、素敵な演舞をありがとう。今の速度は私達のためにかなり遅くしてくれたのよね」
「舞ですから、観客が見えなければ意味がありません」
「ガッハッハ！　オレ達には、物を壊さない方が難しかったな、ラーハルト！」
　クロコダインが陽気に笑う。
「さあ、さっさと庭でお茶にしよーぜ。メルルやヘーかやアバン先生がいろいろ用意してくれたんだ。お腹も空いたし」
「オレ達は先に行こうか。レオナ、なにか手伝うことある？」
「ダイ君、特にないから大丈夫よ～。先に行ってて」
「は～い」
　レオナを残して、他のメンバーは城の裏手に当たる王族のプライベートな敷地に向かう。
　ヒースはずっとラーハルトとクロコダインの演舞を興奮して褒めていた。
　そして、父親のヒュンケルはほぼ空気だった。

「ねえ、なんでうちの国って、定期的に阿呆が湧くのかしら？」
　レオナの言葉にアポロが小首を傾げる。
「歴史は回るということでしょうか？」
「衣服の流行は二十年単位といいますが、それよりも早いですよね」
「レオナ陛下が十四歳の頃にもクーデター未遂がありましたから、衣服の流行よりも忘れるのが早いということですね」
　レオナを守るように三賢者が家臣とレオナの間に入る。
「人は忘れる生き物と言いますから。陛下、忘れないように毎年更新制度を設けたらいかがでしょう？」

「更新制度？」
「三日間、アバンの使徒の元での特訓に参加しなければ、パプニカ王国会議での発言権がなくなるという制度を設けるのです」
　マリンが良いことを閃いた！　とばかりに満面の笑顔で告げる。
「体調が悪い方もいらっしゃるでしょうから、そういう方達には三賢者の元でも可としましょう」
　アポロもにこにこと言う。
「確か、ダイ君は……朝は王城の周囲を五周して、それから腹筋、腕立て伏せ、背筋逸らしなど基本を百回１セットを五回だったかしら……」
「本当に体力がない方は、メドローアの的側に立つのはいかがでしょう？　確かポップ君がメドローアを小さくする訓練をしていましたから。奇跡の魔法を傍近くで体験できるなんて、素敵ですよね！！」
「……素敵かしら……まあ、とりあえずパプニカ王国は不勉強な家臣が湧くという不名誉な噂が立たないように、なんとかしてちょうだい」
「「「御意！」」」
　三賢者の悪乗りで、周囲の家臣の顔色がどんどん悪くなっているが知ったことではない。
「やっぱり、アバンの使徒とその周囲の凄さは体感した方が早いものね。アバン先生やブラスさんに頼んでダンジョン攻略っていう手もいいかも」
「陛下、それはいいですね！！」
　アポロが生き生きとしている。
　しかし、後方の家臣の顔色は土気色になっていた。
（……知ーらないっと～）
　レオナは後方のことはとりあえず無視して、王族のプライベートゾーンで開かれているだろう『のほほんお茶会』を目指して足取り軽く謁見の間を飛び出した。

その後、レオナはヒースを膝に乗せて、仲良くドーナツを半分こしたのでした。

おしまい